

『ドン・ガルシー・ド・ナヴァール』と

『ミザントロープ』について

佐藤保子

はじめに

モリエールの『ミザントロープ』の中には、アルセストが、他の恋人にあてゝ書かれたセリメーヌの手紙について、彼女の不実を追求する有名な場面がある。(Acte IV scène III)。アルセストの切々たるセリフは、我々には悲痛な思いさえ起させるものであるが、しかしそのうちの非常に大きな部分が、多少の変更を加えられはしたが、そっくりそのまゝ、彼の旧作『ドン・ガルシー・ド・ナヴァール』から転用されたものであることは一般に知られている。この転用は、この場面において延数十行に及んでいゝ。(Misanthrope acte IV, scène III の V. 1281—1314 迄は Don Garcir IV—III の V. 1260—1301 と殆んど同じ、%が全く同一。又 misanthrope のこれに先立つ IV—II の V. 1219—1230 は Don Garcie IV—III の V. 1230—1242 と少数の単語を除いて全く同じ、其他二、三行が同じであるのが数ヶ所。)

他の作家の作品から、美しい言葉や、適当なセリフをかりて、自

分の作品に用いることは大して珍しい事ではないし、当時のように作家達の作品の趣向そのものに多くの共通点があるような場合、細かい点をひろって行けば、言葉の類似は数限りなく見つけれらるゝことであろう。その上『ドン・ガルシー』は一六六一年二月四日に初演されたが大要不評判であつたので、作者の死後七年を経るまで印刷されなかつた。一六六六年の『ミザントロープ』に、モリエールが五年前の自作からセリフの転用を試みたとしても、それは大して不合理な事ではなかつたろう。

しかし、その転用が数十行に及ぶという事があまりにも広範囲にわたるという点を度外視しても、アルセストのこれ程迫力に富んだ、この場になくてはならぬ名セリフの殆んどがそのまゝ旧作からの、しかもモリエールの生涯の失敗作からとられたものであるということは、私にとって大きな驚きであつた。

一六五八年十月、モリエールの一座は幸運にもルイ十四世の氣に入る事が出来、田舎巡業の旅役者から一躍パリの王弟殿下専属劇団となつてデビューし、其後一六五九年、六〇年とそれ〴〵 Les

précieuses ridicules, Scapinelle を演じて華々しい成果をおさめた。がそれが少なからぬ嫉妬を買った事は疑いがなく、せつかくのフチ・ブルボン劇場は一六六〇年末急にとりこわしとなった。しかし王や王弟殿下の配慮によつて却つて立派なパレ・ロワイヤルに移った一座は、翌一六六一年一月二十日に開場している。『ドン・ガルシー』が初演されたのはその翌月二月四日であるから、これはパレ・ロワイヤルの開場披露のいみでも、又モリエール一座の今後の評判のために、モリエールが特に力を入れた出しものであつたに違いない。又 *Somaize* の *Veritables Précieuses* によれば、モリエールは *Les Précieuses ridicules* の初演 (1659・II・18) 以前から人々に『ドン・ガルシー』をよんできかせていたというから、これは数年来の構想であつたと考えられる。更に又『ドン・ガルシー』の印刷特許権をすでに上演の前年一六六〇年五月三十一日に得ているという事実は、作者が如何にこの作品を周到に準備していたかを物語っている。その後上演の失敗のため、町では七回で切上げているが、宮廷では一六六三年末に至るまで、種種の出しものに加えて上演していること、更にこの頃又町でも二回試みていること、上演後一年あまりすぎた一六六二年十月十八日には、二年前からすでに特許をえていたこの作品の印刷を、その明らかな不成功にもかかわらず実行しようと考へていた事等は、作者モリエールのこの作品に対する並々ならぬ執着を示しているといえる。

さてこれ程作者の期待をかけられた出しものが見事に失敗した原因については、多分に俳優モリエールの演じ方に關係があつたようである。今迄喜劇役者として人々に親しまれて来た人物が、急に真面目な恋の悩みを告白するプリンスに扮したのをみるのは、観客に

とつて場違いな感じであつたこと³、又悲劇で当時流行して人々の人気を集めていたブルゴーニエ劇場の俳優達のように誇張したセリフまわしをモリエールはせず、ごく自然に演じた事が悲劇的な場面の役柄としては物足りなく思われたこと、又彼の顔形や所作が喜劇には適していても悲劇的なものには適していなかつた事等⁴があげられる。これらの外的な理由は当時の観客にとつてもつともな事であり大きな要因であつたと考えられるが、現在の我々にとつてそれは推測の域を出ない。それでここでは作品の内容だけを対象として、その失敗の原因と、同一のセリフが『ミザントロフ』において成功している原因を検討してみたいと思ふ。

註 (1) *Oeuvres de Molière* (éd. des Grands Écrivains) (2)p. 220
la notice de D.G.

(2) *Ibid.*

(3) *Ibid.* P. 224

(4) *Mille poisson citée par R. Bray: Molière-homme de théâtre* p. 185

(5) *De visé: Impromptu de Hétel de Coude*

Ch. Perrault: Hommes illustres du siècle de Louis xiv

Elonire hypocondre 其他

○

『ドン・ガルシー、ド・ナヴァール』一名『嫉妬深いプリンス』の筋

第一幕

ナヴァールの王子ドン・ガルシーと、カステイリュの王子だと信

じているドン・シルヴがドヌ・エルヴィールの愛を得ようと争っている。エルヴィールはドン・ガルシーに好意をもっているが、ガルシーは理由なく大そう嫉妬する。ガルシーのいるところでエルヴィールにもたらされた手紙がまず彼の疑いをかきたてる。それはエルヴィールの女友達ドヌ・イニエスからのものだったにもかゝらず。

第二幕

エルヴィールの筆になる手紙の切れはしが又もやガルシーを不安にする。彼は弁明されて後やっと納得する。(この部分が多く「Misanthrope」に転用された。)

第三幕

ドン・シルヴがエルヴィールを訪問しているところへガルシーが来て、だまされたと思う。

第四幕

エルヴィールが、難をさけるために男装して彼女の家に避難して来た女友達のイニエスを抱擁しているところを、ガルシーが戸のすき間からみて激昂する。

第五幕

ライバルであったドン・シルヴは、実はエルヴィールの実兄であることが分る。シルヴはイニエスと、ガルシーはエルヴィールと結ばれることになる。

『ドン・ガルシー』の幕があくと、レオン王国の王女ドヌ・エルヴィールが侍女のエリーズに打明け話をしている。ドン・シルヴとドン・ガルシーはいずれ劣らぬ立派な者達だが、ガルシーの方に彼女の心は傾いているということを、彼女は最初のセリフで明確にの

べている。

Et toute mon estime, égale entre les deux,

Laisse vers Don Garcie entraîner tous mes vœux.

(Acte I, Scène I, V. 13, 14)

この告白はきわめて重要な意味をもっており、エルヴィールの心のうちがこんなにも早く明白に言つてのけられていることは、この劇で重大な欠陥となっている。エルヴィールはガルシーを愛している事が観客にとつて明れうになつた以上、今後ガルシーがことごとにつけてエルヴィールの心を疑い、嫉妬に逆上しても、観客にとっては全く意味のないもの、ガルシーの一人勝手な思いすごしという事になってしまう。いわばテーマははじめから解決された形になっている。ガルシーは観客にとつては完全に意味のない jaloux として、単純な下らない喜劇人形としてはじめから割切つて設定されているという感じをうける。しかしこれは、ガルシーのように真面目な、恋の不安に悩むプリンスの役柄なのであるから、この二つのイメージは喜劇としても悲劇としても成立しないアンバランスを人々に与える。モリエールがガルシーに与えようとしたその悶々たる情は、観客にとつてたゞバカ気たものでしかない。ガルシーの嫉妬を、観客にも無理からぬものと思わせ、果してエルヴィールの真意は如何に、この劇の結末はどうなるだろうかという、問題の解明、目的達成といったような劇自体が持たねばならぬ魅力が、はじめからそがれているのである。

第二幕にドン・ロープという人物が現れて、自分の出世欲から、

ガルシーにとり入るべく、ガルシーに種々注進に及んでは彼の嫉妬心をかき立てるという役をしており、これがガルシーの異常とも言ふべき嫉妬の原因をやや納得させてはいるが、大変弱い。シエクスピアの『オセロ』のイヤゴーに似た役柄だが、ドン・ロープが何故そのようにして主人の嫉妬心をあふり立てる必要があるのか分らないし、ごく脇役としてとまづまっている。『ミザントロープ』のアルシノエが、アルセストに手紙をみせてセリメーヌの不実をばくろするその役割に似ているが、アルシノエ程人物としての彫りもなく何より彼がこうした役を演じる必然性がよく納得されない。

『ドン・ガルシー』の問題のなさに反し、『ミザントロープ』は第一幕からすでに多くの問題を含んでいる。アルセストの人間ざらい、異常なまでの潔癖性は、フィラントの言葉にもあるように今後どのような喜劇を展開するだろうかという興味に人々をひきつける。今セリメーヌとの恋愛のみにについて考えても、セリメーヌは本心の分らない、誰にも愛嬌のよい浮気で美しい未亡人という事になっていて、アルセストの嫉妬は客観的にみても充分理由づけられているといえる。彼女は彼の追求に対しては巧みに言を左右する。アルセストの嫉妬をわざとでもあそぶ。アルセストの焦慮は激しくなり、その追求は劇の進行につれてますますきびしくなり、セリメーヌがいよいよ破綻に追いこまれて終幕に至るその追い込みが、観客をぐんぐんとひきずって行く。こういう迫力は『ドン・ガルシー』には全くみられなかったものである。

なるほどガルシーからみると、エルヴィールは明白に彼女の好意を彼に言明したわけではないから、いくらかの嫉妬がおこつても不思議ではない。しかし彼が疑問を抱く毎に、彼女はその場で明快な

弁明と証拠を彼に与えている。例えば第一幕でガルシーとエルヴィールが話していると、使いの者が手紙をエルヴィールの許にもつてくる。するとガルシーの顔色が忽ち不安に曇る。それと知つたエルヴィールは、貴方の病はこの手紙で直るでしょうとすぐにそれを彼によませようとする。彼は自分が嫉妬している等と思われるのは心外、その証拠に絶対よみたくないと本意に反して我を張るが、結局はエルヴィールの心にそむくのはもつとも遺憾であるし、彼女がそれ程強いるならば……とやせ我慢をはった揚句よむ。それは彼もよく知っているエルヴィールの女友達からの手紙で、何ら彼が嫉妬するようなものではなかったのである。

『ミザントロープ』にも転用されて有名な手紙の場面第二幕では、ガルシーがエルヴィールの手になる手紙の半分を手に入れ、これが誰に宛て、書かれたものかと不安に心をさいなまれ、エルヴィールを問いつめに行く。激怒したガルシーに反してエルヴィールは何の事かよく分らないのとばけた返答をする。ガルシーは、彼女がわざととばけて何くわぬ顔をしているのだと思うとますます腹を立てる。これは『ミザントロープ』と同じであっても二人の人物の立場が全然違う。エルヴィールがとばけた返事をし、自分の無実を主張して顔を赤らめないのは、真実彼女が潔癖だからである。それを更に誤解して怒るガルシーはやはり無意味である。

エルヴィールが

Avez-vous, dites-moi, perdu le jugement?

(D.C. II-V, V.551, Mts, IV-■, V.1316)

De quelle trahison pouvez-vous donc vous plaindre?

(D.G. I-V, V.556, Mis, N-■, V.1321)

Voilà donc le sujet qui vous trouble l'esprit?

(D.G. I-V, V.562, Mis, N-■, V.1327)

等と言ってもそれは当然の事である。がこの寸分違はぬ同じ言葉がセリメーヌの口から出る時、観客はアルセストと共に彼女の空とばかり巧みな言いのがれに驚嘆するのである。この皮肉な言葉は嫉妬にさいなまれたアルセストの心をえぐるであろう、従つて

Ah ! que ce coeur est double et sait bien l'art de feindre !

(D.G. I-V, V.557, Mis, N-■, V.1322)

というこれも同じ言葉がガルシーの言葉としては宙にういていたにもかゝらず、アルセストの口から出ると悲痛な重さをもつてひびいてくる。

エルヴィールは、ガルシーの誤解の理由が分ると、その場でもう一方の手紙の断片をもつて来させ、それが他ならぬガルシー彼自身にあてた忠告の手紙である事が明らかになる。ガルシーは自分の非を認めて謝罪し、エルヴィールは彼の嫉妬にはとゞ手をやくが当然の事という印象を我々に与える。ガルシーにとっては真剣に違いないであろうこれらの事件が全く我々の興味をさそふことがない。一方『ミザントロップ』では、セリメーヌの巧みな言いのがれに抵抗出来ないアルセストは却つて逆にセリメーヌに無実の証言を哀願するという結果に終つてゐる。

事件はもう一つあつて、エルヴィールの女友達ドヌ・イニエスが

難を避ける必要から男装してエルヴィールの許に逃れてくる。彼女を抱擁しているエルヴィールを垣間見たガルシーが又突如として嫉妬に我を忘れるが、その場でイニエス自身が現れ、問題は氷解する。ガルシーの嫉妬はこの場合幾分無理からぬところがあるかも知れない。しかしエルヴィールの今迄の潔癖と、ガルシーの一人芝居をみて来た観客にとつては、又一つの誤解という印象しか与えないであろう。先にものべたように、エルヴィールはガルシーを愛しており、問題は観客にとつて解決されているので、劇全体をつらぬいた迫真性がなく、一つ一つの場面が単に思いつきのような挿話に終つてゐる。Somaize が, *Veritables Précieuses* の中、"C'est une fort méchante comédie, car l'on y compte plus d'incidents que dans son *Eclairci*" と書つてゐるが、L'Eclairci ではまだ種々の出来事は結局主人公 Lélie と Célie の結婚を成功させるという目的に一貫されていたし、それに向つての高まりがあつたといえる。ところが『ドン・ガルシー』では、この高まりさえみられず、果てしなく、たゞガルシーの思ひすごしによつて起されるちよつとした波紋が、いわれもなく起つては消えるわけである。

○

このように全く同じセリフが、全く違った効果を生むということは、劇の構成に原因を求めるべきであらう。

モリエールは『ドン・ガルシー』において、恋するものゝ不安、何度確かな証拠をみせられても尚不安な心理状態を追求しようとしたのであらう。そしてこの問題が彼の心を長く占領していたという事はすでにみに通りである。モリエールは悲劇俳優になる希望を長

らく捨てなかつたと同様に、人間の真面目な心の底のかつとうや不安を描きたいと思つていたに違ひない。しかし心の底の不安といつてもそれを理由づけるものがなければ、その不安は狂人のそれと同じものになつてしまふ。本来劇は二つの意志のかつとうの上に成立すると考えられている。Aという意志と、これを阻むBという意志のかつとうが劇である。これがなければ、始まりはすぐ終りに直結され劇は存在しない。『ドン・ガルシー』では、この対立は、セリフの上でみるとガルシー対エルウィールであるが、実はこの対立はガルシーの頭の中だけであつて、はじめから対立は存在しない。ガルシーの立場はエルウィールの立場と同じである。ガルシーのエルウィールに対する愛が乗りこえねばならぬ障害はどこにもない。『オセロ』は一見これと似た形であるが、オセロの対立物はイヤゴであつてこのかつとうは激しい。『ミザントロープ』はアルセスト対セルメーヌ（誠実対不誠実）という正反対の人物のはげしい対立の場になつてゐる。アルセストに対立するものは、彼の場合セルメーヌ一人ではなく、フィラントも含めた社交界全体でもあつた。

こうしてガルシーは滑稽なまざるきり笑劇的な人物として登場した。モリエールはガルシーをこのように設定してしまつたから、彼の立派なセリフは何の役にも立たなくなつてしまつた。ガルシーのように中心人物が滑稽で、その他の人物は良識的だというのは笑劇にみられる方法である。ガルシーはこのような方法でわり切つたものであつた。モリエールは真面目な心の底のかつとうをいきなり笑劇的な構成の中にはめこんで劇を組立てようとしたのであつた。ガルシーはこのような意味で大変不幸な結果に終つてしまつた。しかもこれは笑劇としても成功していない。面白く笑わせる場面が殆

んどない。

ガルシーとアルセストを比べて強く感じられるのは、ガルシーが氣狂いじみて滑稽な（面白いといういみではなく）*bonhomme*として平面的に描かれているのに反して、アルセストが一人の人間として完全に肉付けされているということである。即ちアルセストの滑稽さを平面的に割切るのではなく、色々の場面を捉えて、ある面では滑稽にみえても、ある見方からするとそうではないという点を描きえている。

これは既に少しふれたように、恋愛問題のみでなく、『ミザントロープ』には社交界諷刺の問題がとり入れられて、アルセストがより大きな視野から描き出されていることも関連があるが、アルセストの嫉妬が我々に納得のいくように充分理由づけられていることは大きな進歩だったのである。

ガルシーからアルセストへの移行は、このように劇作上の問題として解明しうるが、こうしたドラマツルギーの進歩を許したのは作者モリエールの人間観の深化であつたろう。アルセスト対セルメーヌの対立は、この劇全体からみて、一つの誠実対不誠実、心の底に持つ正義感と、社交生活上これをカバーせざるを得ない礼儀作法の間に横わる矛盾を示していると言えるが、こうした二つの対立に対するモリエールの理解の度が並々なものでなかつた事を推測せしめるに充分である。

今これをガルシーとアルセストの嫉妬の問題に限つて考えてみる。ガルシーの嫉妬はいわば幸福な嫉妬である。その原因は専ら彼の思いすごしにあるのみであるから、あつてもなくてもいゝような嫉妬である。彼はことごとく不安であるけれども、それは間もなく

解明される。事件が解明されると、彼は嫉妬した自分を恥しいと思ひ、常にそれを恥じている。立派な恋人の前に彼は姿を現すのも恥しく、死んでしまおうとまで考える。彼の嫉妬は、彼の病氣のようなものである。病氣であるからその原因は専ら彼にあつて彼以外の誰も罪があるわけではない。

ところがアルセストの嫉妬は、一つの戦いである。この嫉妬はもはや彼の思ひすごしから起つたものであると考えたりそれを恥じたりする余地がない。セリメーヌのような女を愛しているという自分も、その嫉妬も真実である。このつびきならぬ真実がセリメーヌの不誠実と激しい矛盾をもつてぶつかり合うこの対立は、彼が命がけで解決せねばならぬものだったのである。滑稽でもあり、又真剣でもあるアルセストの姿は、もはや自分自身に自信をもたず妄想に左右されるガルシーのような戯画ではなく、一人の人間の姿として迫力をもつのである。

こゝでモリエールとその妻アルマンド・ベジャールの問題があるがそれはあくまで推測の域を出ない。多くの学者の考証によれば『ミザントロープ』が書かれた時期に、二人の仲は必ずしも悪くなかつたようである。むしろ名セリフの殆んどがすでに『ドン・ガルシー』において完成していたという事実は、アルセストの嫉妬が直接モリエールのそれだと断定する事を不可能にしている。アルセストの苦悩はセリフの一つ一つにみられるのではなく先にのべた対立の深さにあると言えよう。そしてこの嫉妬の場をも含めて、アルセストが示す正しき誠実さと、社交界やセリメーヌが示すうわべの礼儀や不誠実のかつとは虚色にみられたルイ十四世の宮廷に、おかしき道化役者としての生活を送つたモリエールがつぶさに体験したと

ころのものであつたらう。ガルシーとアルセストをへだてるドラマツルギーの進歩は、又こうした作者自身の体験乃至人間洞察に支えられなければならない事と思われる。

中心人物が滑稽一辺倒な笑劇に比べて、必ずしも滑稽ではないところに、モリエールの一部の作品の特徴がある。滑稽なのはこの人物ではなくて、むしろ彼をとりまく他の人物や世間の方ではないだろうか。こういう疑問が自己を肯定した人物には起ってくるであろう。この段階が、モリエール喜劇の歩みに画期的な、一線を劃したものでないかと考えられる。

(6) G. Michant: *Les Luites de Molière*, p. 244

○

二つの作品について、あと二、三の相違をつけ加えて検討してみたい。

もう一つの著しい相違は一方がローマ時代のスペインの町、レオン王国内の出来事であるに対して他方が当時フランスの注目の的であつたルイ十四世の宮廷をとりまくサロンの一つが舞台になつてゐるという事である。ガルシーは *Prince de Navarre*, エルヴィールは *Princesse de Léon*, いわば架空の国で起るプリンス達の恋愛紛議である。一方セリメーヌはじめ『ロザントロープ』の登場人物のすべては、観客にはごく身近なものであつたという事、これは一方の非現実的な世界の話に反して、観客の関心を強く惹くものである。殊に社交界の諷刺としても『ミザントロープ』は立派に成立する。お世辭を言つてもらいたくて

そのくせ口では謙遜するオロントのソネの一場や、つまらぬ見栄をはり合う貴族達、貞女ぶるアルシノエ等生々した人間像が、主題を逸脱することなく展開されているのは見事である。

『ドン・ガルシー』に出てくるドン・シルヴがエルヴィールの兄だと分る結末の reconnaissance は happy end に終るための手段にすぎない。最後の第五幕はたゞ結末を拾収するのに費されている、主題とは関係がない。

『ドン・ガルシー』が happy end に終っているのは劇全体を明るくしていると同時に、ガルシーの嫉妬が本当に理由のなかったものであるという最後の証拠を与えており、他の笑劇と同様の軽い調子になっている。反対に『ミザントロープ』がアルセストの敗北に終っているのは、問題を未解決にとどめてシリアスな印象を与えている。

最後に『ドン・ガルシー』では、ガルシーがはじめから滑稽な一人芝居の jargon として描かれている割合に、観客の笑いをさそう場面に乏しい。これに反して『ミザントロープ』では、アルセストは大真面目であるが、愉快な場面が多い。アルセスト自身が面白い時もあり、セリメーヌやとりまきの貴族達が笑いをさそう事もあるが、要するに喜劇としても成功しているわけである。如何に真面目な主題を扱おうとも、それが笑いを生まないところに真の喜劇が存在する筈がない。『ミザントロープ』がある人々にとつて如何に悲劇的にみえようとも、全体としてはやはり面白くたのしい喜劇である事は忘れてはならない事だと思う。

結語

以上モリエールの二つの作品について、その中にあるセリフのある部分が全く同じであるというところから二つを比較してみた。そのセリフの重みは両方において全く異つており、『ドン・ガルシー』ではモリエールが示した愛着にもかゝらず、主人公ガルシーは下らないカイライとなり、他方アルセストは現実の人間のように深さをもつ不朽のタイプとなった。

その原因は劇の構成にあつて、『ドン・ガルシー』では真の対立がなく従つてかつともないので劇は平板なものとなり、笑劇的にたゞ人物が勝手な思いすこしから嫉妬をするという必然性のない劇となつてしまつた。『ミザントロープ』では、劇全体がアルセスト対社交界という二つの相反するものゝ上に作られていて、互に相容れないものゝかつとうが事件をひきおこして行くという違いであつた。

こうした劇作技術上の進歩は作者モリエールの体験と無関係ではなからう。『ドン・ガルシー』でガルシーの不安や悩みを書くとした作者は、専らガルシー一人が勝手な悩みに苦しんでいてその苦しみには何らの根拠がないという風にしか描かなかつたし又描く事が出来なかつた。こゝにはのつびきならぬ対立がなかつたからである。だが五年後『ミザントロープ』にみられる矛盾の対立は、モリエールの心にひそむ自分自身に忠実ならんとする心と、宮廷生活で余儀なくされる生活の矛盾に対決を迫られたその体験の反映と考えられる真実さを含んでいる。

この対立の真実さが二つの作品をかくも大きくへだた原因であると考えられる。